

清末詩人が「趙飛燕」を窺く

深 澤 一 幸*

1

さる 1877 年、中国でいえば清朝末期の光緒三年、日本では明治 10 年、初代駐日公使何如璋の書記官として日本にやってきた、当時を代表する詩人黄遵憲(1848～1905)は、日本での新鮮な見聞をもとにしつつ、日本の学者との交流や書物からの知識も参考して、日本の世事諸相をあまねく 154 首の七言絶句に歌いあげた「日本雜事詩」二巻を完成した。1879 年、光緒五年、明治 12 年のことである。いま世間に流布する定本は、後の 1898 年、光緒二十四年、かれが湖南の按察使代理の任にあったとき出版されたもので、もとの 8 首を除き、54 首を加えて、200 首としている。

さて、この定本の巻二、第一一七首は「浴池」風呂屋のことを詠じており、それをあげてみる。

湘簾半捲綺窓開 湘簾 半ば捲^まかれ 綺窓は開く
帕腹^{うす}帽頭爛漫堆 帕腹帽頭 爛漫として堆^{うす}たかし
道是蓮池清浄土 道^いう是れ蓮池清浄の土
未妨天女散花來 未^いまだ天女の散花し來たるを妨げずと

かなり雑然としているはずの風呂屋の有様を、うずたかく積みあがった「帕腹」はらまき「帽頭」はちまきで多少形容しているものの、全体は仏教の西方浄土になぞらえて上品にうたいあげている。なお、この詩にかれがつけた本来の自注もあげる。

* ふかざわ かずゆき 大阪大学大学院言語文化研究科

潔を喜び、浴池は最も多し。男女も亦た同浴を許さる。近ごろ禁令有るも、然れども積習は除き難し。相い去ること僅かに咫尺なるも、司空見慣、渾たく慙じる色無し。

ところで、この上品な詩にひきかえ、原「日本雑事詩」第八七首の同じく風呂屋を詠じた詩は、まだ三十歳ほどと若い黄氏が礼教の国から文明開化で開放感あふれる日本に来、未開野蛮とも思える風俗から受けたより直截な刺激を反映して、ずっと生生しくエロチックである。それをあげよう。

蘭湯煖霧鬱迷離 蘭湯煖霧 鬱として迷離たり
背面羅衫乍解時 面を背け羅衫を乍ち解く時
一水盈盈曾不隔 一水盈盈たるも曾つて隔てず
未消金餅亦偷窺 未まだ金餅を消いざるも亦た偷み窺う

蘭の香り漂う湯けむりにぼんやりかすむ中で、後ろ向きに若い女性が薄絹の下着を脱いでいる。そこでは、後漢の「古詩十九首」が天上の牽牛と織女を隔てる天の河を「河漢は清く且つ浅く、相い去ること復た幾許ぞ。盈盈たり一水の間、脈脈として語るを得ず」と歌ったのとは異なり、湯船いっぱい満ちみちているお湯も男女の間を隔てはしない。そのあとに第四句が来る。この句を、私の読みとは異なり、実藤恵秀・豊田穰訳「日本雑事詩」（平凡社東洋文庫、1968年3月）では「未だ消いず 金餅もまた偷み窺うを」と訓読する。そして、そのもとになった1943年7月の生活社版「日本雑事詩」でも訓読は同じく、ただ「金餅」について「金餅とは通常月を指すが、ここでは別な意味に用ひてゐる。」と要領を得ない注をつけている。しかしこの訓読は、使用する典故をつきとめられなかったことによる全くの誤読である。また両氏が参照したろう、いわゆる王韜本に飯島有年氏が訓点をほどこし明治13年（1880）5月に東京で出版された「日本雑事詩」でも、この句は「未消」の間にレ点がついているだけである。

ところで、実藤・豊田両氏がこの句の典故に不明だったのも、無理はない。じつは、ここに使用されている故事は、中国の伝統的な正統な詩文に使われるものではなく、むしろ忌避すべきものだったのである。この故事にたどりつくヒントを私は偶然、おそらく黄氏と同時期に日本を訪れたろう中国知識人の断片的な記述から得た。清末の王錫祺が光緒十七年（1891）に輯めた「小方壺斎輿地叢鈔」第十帙に収められる著者不明の「東遊紀盛」一巻がそれである。この著者は、ダイジェストされた断片内に広州や香港への言及があることからみて、あるいは広東人かもしれない。また訪日の時期については、文中に大阪から京都まで汽車に乗ったとあるので、明治10年（1877）の開通より後、本文が刊行された明治24年（1891）より前というこ

とになる。かれは、上海から長崎・神戸・大阪をへて、明治10年から24年までのある年の十一月十二日に横浜港に到着し、十六日に上陸、まず日本の外務省に滞在したようである。この断片から、著者が神戸の風呂屋に言及した部分をあげよう。

神戸も亦た山に傍^{そば}いて埠^{はとば}を作り、輪艘帆船、往来すること絶えず、固より貿易場中の一都会也。山巔には飛瀑が奔騰し、之を望めば帛練を天際に横たうるが如し。山を環^{めぐ}るは皆な茶楼酒館にして、遊人の此^ここに至れば、各おの其の意の適う所に随い、以て少憩するを得。埠内には浴房林立す。妙見宮と名づくる者有りて、浴房の最^{もと}為り。男女同浴には非ずと雖も、相い近きこと僅かに咫尺にして、微波香霧の中に、隱約として之を見れば、其の妙を名づくる莫く、正に漢成が金を袖にして浴を窺うに效^{なう}うを必せざる也。

「山巔の飛瀑」は、摩耶山にかかる布引の滝。「妙見宮」は、有馬温泉にあるが、神社であり「浴房」ではない。有馬温泉の情報を誤解したか。ところで注目すべきは、ここ神戸の風呂屋では男女の洗い場が至近距離にあるので、必ずしも真似る必要はない、として引かれる「漢成が金を袖にして浴を窺う」の故事である。この「金」が「日本雑事詩」の「金餅」に、「窺う」が「偷み窺う」に通じることは、明らかである。そして、この「漢成」が漢の成帝だと気づいたとき、わたしは故事の出典をようやく発見した。それは、中国の古小説たる「趙飛燕外伝」だった。

「趙飛燕外伝」は、前漢の成帝が皇后たる趙飛燕、昭儀たる趙合徳の姉妹を寵愛したおりのさまざまなエピソードをまとめたものである。作者は漢の潞水の人で河東都尉の伶玄、字は子干、とされているが、すでに清の「四庫全書総目提要」巻一四三、子部小説家類存目一「飛燕外伝一卷 内府蔵本」の条などで「後人の依託」と証明されており、民国の魯迅が「中国小説史略」第四篇「今見る所の漢人小説」で「司馬光は嘗て其の「禍水なり、火を滅す」の語を取りて「通鑑」に入れ、殆んど真の漢人の作と以為えり。然れども恐らくは唐宋人の為りし所ならん」と述べるごとく、おそらく晩唐ごろの作品だろう。この「外伝」（元・陶宗儀編「説郛」百卷本卷三二、百二十卷本司——など）から、成帝が趙合徳の入浴を窺き見る描写をあげよう。

昭儀（趙合徳）は夜に蘭室にて入浴するに、膚体は光發して燈燭^{ちやう}を占う。帝は幃中^{ひそ}従り竊かに之を望む。侍兒は以て昭儀に白^{もう}すに、昭儀は巾を覽^とり、燭を撤せしむ。

他日、帝は約すらく、侍兒には黄金を賜うゆえ、言うを得ること無からしむ、と。私婢は約中^{あずか}に豫らず、幃より出でて帝に値^あい、即ちに入りて昭儀に白す。昭儀は遽^{にわ}かに隱避す。是れ自り帝は蘭室の幃中従り昭儀を窺うには、多く金を袖にし、侍兒・私婢に逢えば、輒^{すなわ}ち牽き止めて之に賜う。侍兒は帝の金を貪りて、一出一入すること絶えず。帝の夜従

の^{かねぶくろ}幣^まを使うは益し、或ときは百金に至る。

この一段は、まさに「東遊紀盛」の「漢成が金を袖にして浴を窺う」の背景を述べており、「成」帝が趙合徳の入「浴」すがたを「窺う」のぞきみるために、侍女や下女に口止め料としてわたす「金」ゴールドの塊をいつも「袖」の下にしのばせていた、ということに違いない。ただ気になるのは、「外伝」では金塊は「黄金」「金」とのみ表現され、「日本雑事詩」にいう「金餅」金の小判とはなっていないことである。

それはともかく、この晩唐ごろに誰かが作り出したろう「漢人小説」は、近人の作家茅盾が「中国文学内の性欲描写」と題する一文で「再び「飛燕外伝」の内容についてみれば、この短文は後世の性欲小説の源泉といってよい。言いかえれば、後世の長篇性欲小説の境地はだいたい「飛燕外伝」から脱胎したものである。」とのべるごとく、もともと小説であることからしても、そのうえ言うのがはばかれるようなエロティックな描写を豊富に含んでいることからしても、まさしくポルノグラフィーだった。それゆえにこそ実作者は漢代に仮託して発表したわけであり、当時の知識人、いわゆる士大夫たちにとっては、当然読むべきものではなく、またたとえ読んだとしても、おのれの書き上げた正統的な詩文上であからさまに言及して、おのれが読んでいることを世間に知らしめるはずのないものだったろう。この予想どおり、以後清末まではほぼ一千年にわたる中国文化史のなかで、「趙飛燕外伝」そのもの、とくにこの入浴の一段の描写に触れた記述はきわめて乏しい。しかし、全くないというわけでもない。以下には、わたしが気づいた各時代での表現をあげてゆきたい。まずは、唐代での例からはじめよう。

2

晩唐を代表する詩人李商隱（813?～858?）が、当時の高貴な女性の下賤な男性との密通という淫乱のさまをなげいた詩「嘆く可し」（『玉溪生詩箋注』巻五）はいう、

幸會東城宴未迴 幸いに東城に会して宴より未まだ迴らず
 年華憂共水相催 年華は水と共に相い催すを憂う
 梁家宅裏秦宮入 梁家の宅裏 秦宮入り
 趙后樓中赤鳳來 趙後の樓中 赤鳳來たる
 冰簟且眠金鏤枕 氷簟 且らく眠る 金鏤の枕
 瓊筵不醉玉交杯 瓊筵 酔わず 玉交の杯
 宓妃愁坐芝田館 宓妃は愁いて芝田の館に坐し
 用盡陳王八斗才 用い尽くす 陳王八斗の才

この詩の第三句、後漢二帝の皇后の兄として朝政を牛耳っていた大將軍梁冀の妻の居所に梁冀の愛する監奴の秦宮がしのび入る、と対になる第四句、趙飛燕皇后のすまう高殿の中に宮奴の燕赤鳳がしのびこんで来た、とは、明らかに「趙飛燕外伝」にもとづく。その部分をあげよう。

后（趙飛燕）の通ずる所の宮奴たる燕赤鳳なる者は、雄捷にして能く觀閣を超え、兼ねて昭儀に通ず。赤鳳は始め少嬪館を出づるに、后は適^{たま}た来幸す。時は十月五日、宮中の故事として、靈安廟^{たてまつ}に上つる。是の日は塙を吹き鼓を撃ちて歌うに、臂を連ね地を踏み、「赤鳳来」の曲を歌う。后は昭儀に謂いて曰わく、「赤鳳は誰^たが為に來たる」と。昭儀曰わく、「赤鳳は自のずから姉の為に來たる。寧^なんぞ他人の為ならん乎。」后は怒り、杯を以て昭儀の裾に抵^あてて曰わく、「鼠子は能く人を囓^かむ乎」と。昭儀曰わく、「其の衣^{うが}を穿ち、其の私を見れば、足れり。安んぞ人を囓むに在らん乎」と。

この一段は、五代の馮贇の作とされるが実は南宋の「類説」にもとづく「雲仙雜記」卷九「赤鳳凰」にも「趙后外伝」として引かれている。叙述の前半は、民国の余嘉錫「四庫提要弁証」卷一七や洪業「再び西京雜記を説く」などによって晋の葛洪が漢の劉歆に偽托したと考証される「西京雜記」卷三「戚夫人の侍兒が宮中の樂事を言う」（晋の干宝の「搜神記」卷二にも同文あり）にもとづくだろう。その部分をあげれば、

戚夫人の侍兒たる賈佩蘭は、後に出でて扶風の人段儒の妻と為る。……又^いた説う、「宮内に在りし時、嘗つて絃管歌舞を以て相い歓娛し、競いて妖服を為し、以て良時に趣く。十月十五日、共に靈女廟に入り、豚黍を以て神を楽しませ、笛を吹き筑を撃ち、「上靈」の曲を歌う。既にして相い与に臂を連ね、地を踏みて節を為し、「赤鳳凰来」を歌う」と。

「外伝」の「赤鳳」が「西京雜記」などからヒントを得たろうことは、両文を比較すれば明らかだが、「西京雜記」などが語るのは漢の高祖の戚夫人の故事であり、李商隱が作詩のおりに参照したとはいえ、かれが典故としたのは、おそらくほぼ同時代に成立したろう「趙后」趙飛燕の姉妹と「赤鳳」の故事を語る「外伝」にちがいない。

この推測を確かにするのは、李商隱の外甥で、その即席詩が商隱を感心させ、「雛鳳は老鳳の声よりも清し」（韓冬郎が即席にて詩を為り相い送られ、一座尽とく驚く。他日、余は方^{まさ}に「連宵坐に侍り徘徊すること久し」の句を追吟するに、老成の風有り。因りて二絶を成し、寄せ酬い、兼ねて畏之員外に呈す）「玉溪生詩箋注」卷四）の句を寄せられた韓偓（844～914?）がその艷情詩集「香奩集」に収める「浴を詠ず」る詩である。この詩題がずばり示すごとく、全体にわたって「外

伝」が描く趙合徳の入「浴」の有様を想像ゆたかに「詠」じている。

再整魚犀攏翠簪 再び魚犀（の櫛）を整え翠簪を攏え
解衣先覺冷森森 衣を解きて先づ覚ゆ 冷森森たるを
教移蘭燭頻羞影 蘭燭を移さしめて頻りに影を羞じ
自試香湯更怕深 自ずから香湯を試みて更に深さを怕る
初似洗花難抑按 初めは似たり 花を洗いて抑按し難きに
終憂沃雪不勝任 終わりは憂う 雪に沃ぎて任に勝えざるを
豈知侍女簾幃外 豈に知らんや 侍女は簾幃の外
賸取君王幾餅金 賸つさえ君王の幾餅かの金を取りしを

「花」も「雪」も真白であでやかな合徳の女体をいう。とくに終りの第7・8句、「思いもよらぬことだ、侍女がとばりの向こうにいて、そのうえ君王様の金餅を幾枚かせしめていようとは」は、時空をへだてつつも、完全に黄遵憲の詩句と呼応している。また、この詩は南宋末の方回編のアシソロジー「瀛奎律髓」巻七「風懷類」にも収められているが、その注で方回は「趙后外伝」として「昭儀浴す。帝は竊かに之を觀、侍兒をして言う勿からしめ、投贈するに金を以てし、一浴ごとに百餅を賜う」と引く。

なお、韓偓は「紅き芭蕉の賦」（「全唐文」巻八二九）でも「趙合徳は裙間に一たび点ぜられ、白玉の唾壺に同ぜんことを願う」とうたうが、これも後述する「外伝」の「唾袖」の故事にもとづくだろう。

つぎは、北宋での有様をのべる。宋初に劉筠・楊億・錢惟演の三詩人が、まさに今とりあげた李商隱詩のスタイルをまねて唱和しあった作をあつめた「西崑酬唱集」巻上の、「荷花」をテーマにした「再び七言を賦す」での錢惟演（?～1033?）の作は、こううたう。

欲網珊瑚碧浪深 珊瑚を網せんと欲すれば碧浪深し
横塘斜日帶秋陰 横塘 斜日 秋陰を帶ぶ
漢宮此地留金餅 漢宮 此地 金餅を留め
洛浦何人遺錦衾 洛浦 何人か 錦衾を遺る
舞學西城廻雅態 舞は西城を學びて雅態を廻らし
歌傳南國有餘音 歌は南國を伝えて余音有り
韓憑恨魄如長在 韓憑の恨魄 如し長しえに在らば
青骨香銷亦見尋 青骨の香り銷ゆるとも亦た尋ねられん

この詩の第三句は、もとは漢の宮殿だったこの地にまだ「金餅」金の小判がのこっている、
とうたうが、「金餅」はおそらくその形と輝きで蓮の花びらにたとえているのだろう。そして、
この句と対をなし「錦衾」がやはり蓮の花にたとえられる第四句は、後漢の「古詩十九首」の
「錦衾を洛浦に遺り、同袍は我れと違う」という旅中の夫と洛浦の女神宓妃との交流を妻がう
たう句にもとづくが、李商隱の「嘆く可し」でも第七・八句は同じく宓妃の故事を用いていた
ので、この第三句もあるいは「趙飛燕外伝」の漢宮の中で成帝が侍女たちに賜った「金」餅
のイメージを裏に持つのでないか、と推測したい。

つぎは、魯迅も「中国小説史略」で言及していた司馬光（1019～1086）の歴史書「資治通鑑」
巻三一、漢の成帝の鴻嘉三年（BC 18）の一条を検討しよう。趙飛燕姉妹への寵愛を述べた
段落の始め、「其の後、上（成帝）は微行して陽阿主の家に過り、歌舞者趙飛燕を悦ぶ」の
本文につき、司馬光はかれ自身の注釈「資治通鑑考異」で「（漢書）五行志は「河陽主」に作
り、伶玄の趙后外伝及び荀（悦）の（漢）紀も亦た「河陽」に作る」とコメントする。

そして魯迅のあげた「通鑑」の「宣帝時の披香博士たる淳方成有りて（成）帝の後に在り、
唾して曰わく、「此れは禍水也。火を滅すること必せり」と」は、たしかに「趙飛燕外伝」の
「宣帝の時の披香博士たる淳方成は、宮中にて教授し、淳夫人と号せしが、帝の後に在り、唾
して曰わく、「此れは禍水也。火を滅すること必せり」と」にもとづくだろう。

また沈括（1031～1095）の「夢溪筆談」巻二「異事」にも、金餅にまつわる興味深い記述
がある。

襄（州）随（州）の間は、故の舂陵・白水の地にして、土を発すれば多く金の麟趾・褭蹏
を得たり。麟趾は中空にして、四傍には皆な文有り。刻は極めて工巧なり。褭蹏は団餅に
作り、四辺には模範の跡無く、平物の上に於いて滴たらせ成すに似て、今の乾し柿の如く。
土人は之を「柿子金」と謂う。「趙飛燕外伝」の「帝は趙昭儀の浴するを窺い、多く金餅
を褰に^{そて}し、以って侍女・私婢に賜う」とは、殆んど此の類い也。

襄州はいまの湖北省襄樊市あたり、随州は同じく湖北省随州市あたり。当時その一帯から、
漢の武帝の太始二年（BC 95）白麟と天馬の瑞祥があらわれたので鑄造し諸侯王に下賜された
「麟趾」麒麟の足跡形と「褭蹏」名馬のひづめ形の黄金が出土したのである。とくに金のひづ
めは「団餅」饅頭のかたちをして、干し柿のようで、「柿子金」とよばれており、「外伝」にい
う成帝の賜った「金餅」の形状もこのようだったろうと、沈括はコメントする。ここで注意
すべきは、現存する「外伝」の先にもあげた元代のテキストでは「多く金を袖にし」とあると
ころ、沈括のより古い引用では「多く金餅を褰にし」となっており、黄遵憲の「雜事詩」の
「金餅」とまさに通じあっている。

ところで、この「趙飛燕外伝」の北宋での流布状況について、きわめて重要かつ的確な補足をしてくれるのは、近人錢鍾書氏の「管錐編」(1979年8月、中華書局)第三冊、二九「全漢文卷五六」、伶玄「飛燕外伝」を論じた条である。錢氏はまず「按ずるに此の伝の贋作なるは、已に定論有り。章法筆致は唐人の伝奇に酷肖す」と述べ、北宋については次のごとく詳述する。

玄の此の「伝」は北宋にして始めて多く徴引す。章章として人の耳目に在る者は、司馬光の「通鑑・漢紀」卷三二に「禍水滅火」を采り、蘇軾(1037～1101)の「九日舟中にて有美堂に魯少卿の飲むを望見し、詩以って之に戯る」、「王鞏に次韻す」の六、「朝雲詩」に屢しば「髻を擁して玄に伴う」と道うが如し。釈惠洪(1071～1128)の「石門文字禪」卷二七「達道の蓄うる所の伶子于の文に跋す」は人の道うこと^{すくな}に似たるも、「通徳の論ずる(所の)「慧男子」は、殆んど天下の名言なり。(吾れ以謂らく)子于に此の婢有るは、維摩詰の天女有るが如き也」と曰う有り。衲子にして賞会是れに在り、「浪子和尚」の号は虚しからざる也。(清の)錢謙益の「有学集」卷二〇「李縉仲詩の序」も亦た極めて通徳の語を称して、以って深く仏説に契うと為し、且つ之を申ばして曰わく、「「流」れて後返る、道に入る也遠からず」と曰う。蓋だし即ち「華嚴經」の「先に欲鉤を以って牽き、後に佛智を成さしむ」の旨にして、更に「紅樓夢」第一回到謂う所の「色自り空を悟る」に類す。李易安(清照、1084～1151?)の「打馬図經」の「慧ならば即ち通じ、通ずれば(即ち)達せざる所無し」も、亦た通徳の語に本づくを隠す。

たしかに蘇軾の「九日舟中にて有美堂上に魯少卿の飲むを望見し、詩を以って之に戯る二首」(「蘇文忠公詩合注」卷一〇)の第二首には

遙知通徳淒涼甚 遙かに知る 通徳は淒涼なること甚だし
擁髻無言怨未歸 髻を擁して言無く 未まだ帰らざるを怨めるを

とあり、明の田汝成の「西湖遊覧志余」卷一〇でも取り上げる。また「次韻して王鞏に和す六首」(「合注」卷二一)の第六首には

熏衣漸嗅衙香少 衣を熏じて漸やく嗅く 衙香の少なきを
擁髻遙憐夜語清 髻を擁して遙かに憐れむ 夜語の清きを

とあり、「朝雲詩」(「合注」卷三八)には

清末詩人が「趙飛燕」を窺く（深澤）

不似楊枝別樂天 楊枝の樂天に別るるには似ず
恰如通德伴伶玄 恰かも通徳の伶玄に伴なうが如し

とある。これらはすべて錢氏のいうごとく、「趙飛燕外伝」末尾の伶玄自序にもとづく。以下にその一段を引こう。

哀帝の時、子^{むすめ}于は老にして休め、妾の樊通徳を買う。(樊)嫫の弟の子不周の女也。才色有りて書を知り、司馬遷の「史記」を慕い、頗る能く趙飛燕姉弟の故事を言う。子于是閒居して、言うを命ずるに、厭厭として倦まず。子于是通徳に語りて曰わく、「斯の人は俱に灰滅せり。当時精力を疲らし嗜欲を馳騁し蠱惑せしの事は、寧んぞ終には荒田野草に帰するを知らん乎」と。通徳は袖にて占^{おほ}い、燭影を顧視し、手で以って髻を擁し、凄然として泣下り、其の悲しみに勝えず。子于も亦た然り。

そして、蘇軾の三首の詩句につき、南宋の諸注、たとえば「注東坡先生詩」の施元之・顧禧・施宿の注は「趙飛燕外伝河東都尉伶玄自叙」「趙飛燕外伝自序」,「王状元集百家注分類東坡先生詩」の李厚や葉堯卿の注は「伶玄伝」などとして、「伶玄自序」を變形節略したかたちで引く。

また、錢氏のあげる「石門文字禪」「打馬図経」に關係するのは、「自序」の次の一段である。

通徳は子于に語りて曰わく、「凡そ天の色に淫するは、慧男子に非ざれば至らざる也。慧ならば則ち通じ、通ずれば則ち流る。流れて其の防ぎを得ざれば、則ち万物は態を変えて、溝と為り壑と為り、往かざる所無し。……」

さて、「自序」の伶玄と樊通徳の故事は、蘇軾の弟子で「蘇門四学士」の一人たる黄庭堅(1045～1105)の「甯子与が予の岳陽楼詩に追和し、復た次韻す二首」(「山谷詩内集注」卷一九)の第一首にも

去年新霽獨憑欄 去年 新たに霽れしに独り欄に憑れば
山似樊姬擁髻鬢 山は樊姫の髻鬢を擁するに似たり

とあり、蘇軾の薰陶によるかもしれない。南宋の任淵の注は「趙飛燕外伝の序」として「伶玄は妾の樊通徳を買うに、才色有り、頗る能く趙飛燕姉弟の故事を言う。燭影を顧視し、手で以って髻を擁し、凄然として泣下る」の文を引く。

また、晁説之（1059～1129）の詩「偶たま双頭の蓮花を得て戯れに作る」（「景迂生集」巻四）の冒頭は

君不見昭儀飛燕姊妹在漢宮 君見ずや 昭儀飛燕姊妹は漢宮に在りて
同妍共麗媚赤鳳 妍を同じうし麗を共にして赤鳳に媚ぶ
赤鳳一日與俱逝長空 赤鳳は一日 与俱に長空に逝く

と歌いですが、これも「外伝」が背景にあるだろう。ところで、晁説之は、やはり「蘇門四学士」の一人たる晁補之とはいとこで、蘇軾にも目をかけられていた。「外伝」への興味は、黄詩と同じく蘇軾から授かったかもしれない。

そして、北宋の「外伝」の引用で注目すべきは、とくに錢鍾書氏の挙例に明らかなごとく、ほとんどがエロティックな本文を避けて、さしさわりの少ない「自序」の部分を使うことである。これも、当事の「外伝」の知識人たちの間での位置を示すものだろう。

3

さて、南宋になると、個人の蔵書目録に、「外伝」が明記されている。まず晁公武は「郡齋読書志」巻九「伝記類」に「趙飛燕外伝一卷」と記し、「右は漢の伶玄子于の撰。茂陵の卞理が之を金縢漆櫃に蔵す。王莽の乱に、劉棻が之を得、世に伝う。晋の荀勗が校し上つる」と「外伝」の述べる疑わしい由来をそのまま書きうつす。

晁氏が素直に信じこんだのと対照的なのが、陳振孫である。その「直齋書録解題」巻七に「飛燕外伝一卷」とあり、「漢の河東都尉の伶玄子于の撰と称す。自から揚雄と同時と言うも、史には見る所無し。或ものは偽書也と云う。然れども通徳の髻を擁せし等の事は、文士多く之を用う。而して「禍水火を滅す」の一語は、司馬光之を「通鑑」に載せり」とコメントしているごとく、漢代の真書とは見ていないようだ。なお、ここでの「通徳髻を擁す」は、上述した多数の文士たる蘇軾らの用例に明らかなごとく、趙飛燕姉妹が秘技をつくしたものの子宝に恵まれず「荒田野草」に帰したという伶玄の言葉を聞いて、妾の樊通徳が「髻を擁」してさめざめと泣いたというあたりの描写をいおう。

また、南宋では、類書にも「趙飛燕外伝」からの記載がある。たとえば、曾慥の編になる「類説」巻一では「趙后外伝」のもとに「宜主・合徳」「新興髻・慵来粧」「禍水滅火」「遠条館」「溫柔郷」「唾袖」「婕妤翊護」「七香苴蕤湯」「万年蛤・不夜珠」「二十六物」「合宮之舟」「簪擊玉甌」「留仙裙」「赤鳳自為姊来」「紫玉九鸞釵」「少嬪館」の項目が立てられている。

また、「錦繡万花谷」前集では巻四「雜日」に「趙飛燕外伝」と注して「十月五日、赤鳳来

の曲。漢宮故事に、十月五日、靈女廟に上つる。塙を吹き鼓を撃ち、臂を連ねて踏歌す。赤鳳來の曲を歌う」を引き、卷一七「妓妾」冒頭にはさきの「通徳髻を擁す」の条を引き、同じく「美人」には「雪体に軫粟無し」「溫柔郷」「唾花」（唾袖に同じい）の三条を引いて、「並びに趙后外伝」と注する。

また、古琴にまつわる類書ともいえる虞汝明の「古琴疏」（「説郛」百二十卷本・司一〇〇）には、「趙飛燕は宮奴の赤鳳と^なじむ。後に赤鳳は事の^も泄るるを^{おそ}懼れ、^に亡げ去る。后は之を思いて已まず、赤鳳來の曲を製る。恒に琴を援りて之を歌い、未まだ嘗つて涙の下らざることあらず。其の琴に名づけて鳳皇と曰う。帝は卒に覺らざる也」という、明らかに「外伝」にこじつけた記述を引く。

また、南宋の詩においては、張嶠（1096～1148）に「趙飛燕外伝を読む雜詩」七首（「紫微集」卷一〇）があり、飛燕姉妹の末路をいたむが、その第三首をあげれば、

魏宮悵望楊花去 魏宮 悵望す 楊花の去るを
漢掖齊歌赤鳳來 漢掖 齊しく歌う 赤鳳の來たるを
淫蟲到頭成底事 淫蟲 到頭 ^な底事をか成す
荒田野草但堪哀 荒田 野草 但だ哀しむに堪う

また、「外伝」での「赤鳳」との密通にからんだ詩では、王洋（1087～1154）の「王垂之が元夕に客を招き、庭下の紅梅兩株は相い対して盛んに開く」（「東牟集」卷二）に紅梅の風情をたとえて、

華清池畔嬌無力 華清池畔 嬌として力無く
赤鳳樓中困未眠 赤鳳樓中 ^な困けれど未まだ眠らず

とあり、樊通徳にからむものでは、鄭剛中（1088～1154）の「十月五日に季野の家に集まり帰りての作」（「北山集」卷四）に

酣歌美清夜 歌 ^{たけな}酣わにして清夜美しく
擁髻侍通徳 髻を擁して通徳侍る

とある。また鄭清之（1176～1251）の「葦芷の雪の韻に和す」（「安晚堂集」卷八）には雪からの連想を、

射鵬人去飛燕寒 鵬を射る人は去りて飛燕は寒く
擁衾内視方閉息 衾を擁して内視して方めて息を閉ざす
能令赤鳳冒白羽 能く赤鳳をして白羽を冒さしめば
夜半翻翻天際識 夜半に翻翻して天際に識らしめん

と「外伝」の「雪体に軫粟無し」の一段、つまり「夜雪なり。(密通している羽林の)鳥を射る者と舍傍に期す。飛燕は露立するも、息を閉ざし氣を順らし、体温は舒びて疹粟(鳥肌)亡し。鳥を射る者は之を異とし、以って神仙と為す」もからめてうたう。

また、范成大(1126～1193)の「楽先生は新堂を開き、以って芍薬・餘蘼を待つ。詩を作り奉贈す」(『范石湖集』巻二)詩には、

多情開此花 多情 此の花開き
豔絶溫柔郷 豔絶たり 溫柔郷

と芍薬・餘蘼の「二妙」の花のあでやかさをうたうが、「溫柔郷」は「外伝」の「后は(樊)嫺の計を徳とし、是の夜に合徳を進む。帝は大いに悦び、輔属せる(彼女の)体の、所として靡ならざる無きを以って、溫柔郷と謂い為せり」とあるにもとづこう。

また、「赤鳳」にからむ詞としては、劉辰翁(1232～1297)の「祝英台近」(『須溪集』巻九)の調べにのせた「席間に繡毬を詠ず」と題する詞に

是誰拋過東牆 是れ誰か抛りて東牆を過ぎし
今無赤鳳 今は赤鳳無く
夢得似那人身捷 那の人の似く身捷きを夢み得んや

とある。さて、この「詞」小唄という文学ジャンルは、もともと酒席での妓女とのやりとりから発展したもので、これ以後も「外伝」と深く関わっていく。

ところで、これまであげてきたのは、おもに「外伝」のなかでも「赤鳳」にからむ用例だったが、これはあくまで「外伝」の宋代における流布・受容の状況を確認するためであり、本論からいえばわき道である。より検討すべきは、やはり趙合徳の入浴シーンの当時における反映だが、北宋では、確認しきれない錢惟演の詩句と、これは確かな「夢溪筆談」の一条をあげたのみだった。しかし南宋になると、詩歌のなかに入浴の描写がいくらか増加する。まず岳珂(1183～1234)の「無題」(『玉楮集』巻三)をあげよう。

秋水芙蓉試早粧 秋水の芙蓉 早粧を試ろみ
半軒微雨灑鴛鴦 半軒の微雨 鴛鴦に灑ぐ
細腰正欠酬金餅 細腰 正に欠く 金餅を酬いるを
奮翼何堪卸玉梁 奮翼 何んぞ堪えん 玉梁を卸すに
髮鬢釵橫人在牖 髪は鬢く釵は横たわりて人は牖に在り
繩低斗轉月侵床 繩は低れ斗は転じて月は床を侵す
無情花影雲來去 情無き花影 雲は来去し
都做一天風露涼 都て做す 一天風露の涼しきを

第三句、かの楚の靈王が好んだとおりの「細腰」やなぎごしの、身軽に舞った趙飛燕姉妹にもたぐえられる美人だが、「金餅」をばらまいた漢の成帝のようなパトロンは「欠」いている。それは、「奮翼」のような髪から「玉」の「梁」相、髪かざりを「卸」すなんてできない、という第四句と対になり、「外伝」の気分をただよわせている。

また、南宋の魏慶之の「詩人玉屑」巻一九「劉後村」は黄玉林の「玉林詩話」を引くが、ここでは劉克莊（1187～1269）の「齊人少翁招魂歌」「趙昭儀春浴行」「東阿王紀夢行」をあげ、「此の三篇は、長吉（唐の李賀）に絶類し、其の精妙なる処は、恐らく賀の集中にも亦た多くは見ざらん」と絶賛する。しかし、この三詩は、劉の全作を網羅して宋末に刊行された「後村先生大全集」196巻には収められていない。そして、のち明の楊慎の「劉後村三詩」（「升菴集」巻五五、また「升菴詩話」巻一二）は「詩人玉屑」をそのまま踏襲し、「劉後村集中の三樂府は李長吉の体に效うも、人の之を知ること罕なり。今此ここに録す」としてこの三詩をあげ、「三詩は皆な佳にして、宋に詩無しと云う可からざる也」と褒めあげる。ここで李賀の「美人の頭を梳く歌」に通じる第二詩「趙昭儀春浴行」をあげよう。

花奴一雙鬢垂耳 花奴 一雙 鬢は耳に垂れ
綠繩夜汲露桃蕊 緑繩 夜汲む 露桃の蕊
青桂寒煙濕不飛 青桂の寒煙 湿りて飛ばず
玉龍呵暖紅薇水 玉龍 呵して暖む 紅薇の水
翠靴踏雲雲帖妥 翠靴は雲を踏み雲は帖妥たり
燕釵微卸香絲髻 燕釵は微かに卸し香糸は髻つ
小蓮夾擁真天人 小蓮の夾み擁するは真の天人
紅梅犯雪畝一朵 紅梅 雪を犯して一朵畝だつ
鸞錦屏風畫水月 鸞錦の屏風 水月を画き
鵲鵲抱頸啜蘭葉 鵲鵲は頸を抱いて蘭葉を啜る

劉郎散盡金餅歸 劉郎は金餅を散じ尽くして帰る
笑引香綃護癡蝶 笑いて香綃を引き癡蝶を護る

この詩の第五句「翠靴は雲を踏み雲は帖妥たり」から第八句「紅梅は雪を犯して一朵欹つ」まで、いずれもきわめて艶かしい四句が、おそらく趙合徳の春浴の有様で、それを窺きおわった「劉郎」成帝は、すでに袖に入れていた「金餅」を侍女たちに「散」ばらまき「尽く」していたわけである。

なお、劉の「雜詩一百首」（『後村先生大全集』卷一四）の「十妾」には「樊通徳」と題する詩を収めるが、明らかに「外伝」による。それを参考にあげておく。

粧束姑随世 粧束 姑らく世に随い
風流亦動人 風流も亦た人を動かす
等閑擁髻語 等閑なり 髻を擁しての語
千載尚如新 千載も尚お新たなるが如し

つぎに取り上げたい詩は、いまの劉の「春浴行」の影響が明らかな方岳（1198～1262）の「趙昭儀の春浴」（『秋崖先生小稿』卷八）である。

紅薇滴露護輕寒 紅薇は露を滴らせて輕寒を護り
微髻香絲卸玉鸞 微かに香糸を髻とし玉鸞を卸す
祇道春風庭掖祕 祇だ道う 春風庭掖は祕なりと
外間已作畫圖看 外間は已に画図を作して看るに

第一句は劉詩の「玉龍は呵暖す紅薇の水」を、第二句は劉詩の「燕釵は微かに卸し香糸は髻つ」を下敷きに行っていることは、明らかである。またこの詩から、当時の民間で「趙昭儀春浴」の図画が流布していたらしいことがわかる。

また、南宋の詞においては、蔣捷（咸淳十年（1274）の進士）が「玉漏遲」（『竹山詞』）の調べにのせ、「傳巖隱木は初め武林（いまの浙江省杭州市）に如き、浴室の徐氏の女子を客楼に納る。其の帰る也、亦た之を居る所の楼上に貯え、而して西湖の景を樓壁に図す」と長題した詞の後関にはいう、

料想小閣初逢 料想す 小閣に初め逢いしに
正浪拍紅貌 正に浪は紅貌を拍ち

袖飛金餅	袖より金餅飛びぬ
樓倚斜暉	樓に斜暉に ^よ 寄り
暗把佳期重省	暗かに佳期をば重ねて省りみる
萬種惺忪笑語	万種の惺忪たる笑語
語一點，溫柔情性	語るは一点 溫柔たる情性
釵倦整	釵は整うるに倦み
盈盈背燈嬌影	盈盈たり 燈に背ける嬌影

この詞がうたうのは、傳氏と杭州の「浴室」の女子との出会いであり、「外伝」の浴室にからむ「袖より金餅飛ぶ」の典故を使うのは、きわめてふさわしい。なお、「紅猊」は獅子のすがたを彫った紅玉製の香炉で、その口から香煙を吐く。やはり南宋の華岳の「浴」詩（「翠微南征録」卷二）に「蠟花は照らし入る蘭湯の閣、珠璣は体に^{はとば}進しり紅猊は^い活く。鳳は雲濤を^{ひら}豁きて錦毛を^{あら}濯い、龍は雪浪を翻えて銀甲に^{そそ}澆ぐ」、「忤判院に寄す八首」其の五（「南征録」卷一）に「紅猊は消え尽くして水は花を生じ、清夜迢迢として玉漏^{おそ}除し」とある。

ところでこの時期、南宋と対峙していた北方の金にも「趙飛燕外伝」はもちろん広まっていた。そのことを示すものとして、世宗のとき史館編修・翰林学士などをつとめた党懷英（1134～1211）が趙飛燕の肖像画をうたった詩「趙飛燕の写真」（「中州集」卷三）をあげよう。

昭陽宮裏千蛾眉	昭陽宮裏 千の蛾眉
中有一人輕欲飛	中に一人の輕きこと飛ばんと欲する有り
姊妹貞縁特新寵	姊妹 縁に ^よ 真りて特に新寵あり
六宮鉛粉無光輝	六宮の鉛粉 光輝無し
春回太液花如繡	春は太液に ^{かえ} 回りて花は繡の如く
花底輕風扶翠袖	花底の輕風は翠袖を ^{きさ} 扶う
君恩不許作飛仙	君恩は飛仙と ^な 作るを許さず
襞積宮裙留淺皺	襞積ある宮裙は淺皺を留む
君王貪宴溫柔鄉	君王は宴を貪る 溫柔の郷
木門不省搖倉琅	木門は省みず 倉琅を揺らすを
避風臺成略今古	避風台成りて今古を略し
空使遺妬驚霓裳	空しく遺妬をして霓裳に驚かしむ
當年傾城復傾国	当年 城を傾け 復た国を傾く
誰寫餘妍入丹碧	誰か余妍を ^か 写きて丹碧に入れし
背燈擁髻一潸然	灯に背き髻を擁して一たび潸然たり

不應尚有樊通德 応に尚お樊通徳有るべからず

第五句「春回云々」から第七句「君恩云々」までの三句は、「外伝」の「婕妤（趙合徳）は帝を太液池に接し、千人舟を作り、合宮の舟と号す。池中は起こして瀛州と為し、樹は高さ四十尺。帝は流波文縠の無縫衫を御し、后（趙飛燕）は南越より貢ぜし所の雲英の紫裙を衣、碧瓊輕綃の広袖もて樹上に坐す。后は「帰風」「送遠」の曲を歌舞す。帝は文犀の簪を以て玉顫を撃ち、后の愛する所の侍郎たる馮無方に簫を吹き以て後の歌に倚らしむ。中流にて、歌は酣わに、風は大いに起こる。（趙飛燕は）風に順いて音を揚ぐ。（馮）無方は長喩細嬾し、与に後の裙褊に相い属して曰わく、「我れを顧みよ我れを顧みよ」と。后は袖を揚げて曰わく、「仙乎仙乎。故きを去りて新しきに就く。寧んぞ懷いを忘れん乎」と。帝曰わく、「無方よ、我が為に后を持て」と。無方は吹を捨て後の履を持つ。風霽れ、后は泣きて曰わく、「帝は我れに恩あり、我れをして仙去するを得ざらしむ」と。悵然として曼嘯し、泣数行下る」とある。第八句「褰積云々」は「外伝」に「它日、宮姝の幸ある者は、或いは裙を褰みて縋と為し、号して留仙裙と曰う」とある。

第十句「木門云々」は、「漢書」五行志中之上に「成帝の時の童謡に曰わく、「燕燕 尾は涎涎、張公子、時に相い見る。木門の倉琅たる根、燕飛来し、皇孫を啄ばむ。皇孫死して、燕は矢を啄ばむ」と。其の後、帝は微行出遊を為し、常に富平侯の張放と俱にし、富平侯の家人と称す。陽阿主に過りて楽を作し、舞者の趙飛燕を見て之を幸す、故に「燕燕 尾は涎涎」と曰い、美好の貌也。張公子は富平侯（たる張安世の四世孫の張放）を謂う也。「木門の倉琅たる根」とは、宮門の銅鍔を謂い、將に尊貴ならんとするを言う也」とある。

第十一句「避風台云々」は、「外伝」作者が参考したと思われる晋の王嘉の「拾遺記」卷六「前漢下」に「（成）帝は常に三秋の閑日を以て飛燕と太液池に戯る。……帝は毎に輕蕩し以て飛燕を驚かすを憂い、吹飛の士に命じ、金鎖を以て雲舟を波上に纜がしむ。輕風の時に至る毎に、飛燕は殆んど風に随い水に入らんと欲す。帝は翠纓を以て飛燕の裙を結び、遊び倦みて乃ち返る。飛燕は後に漸やく疏まれ、常に怨みて曰わく、「妾は微賤なり。何んぞ復た纓裙の遊に預かるを得んや」と。今太液池は尚お避風台有り、即ち飛燕が裙を結ぶの処」とある。

4

つづいては、元代における「趙飛燕外伝」の反映を見ることにしよう。まず王恽（1227～1304）には「趙飛燕伝を読む」（『秋澗先生大全文集』卷二七）と題する詩がある。

清末詩人が「趙飛燕」を窺く（深澤）

木門蒼莨向夜開 木門蒼莨として夜に向いて開き
富平騶騎欲誰猜 富平の騶騎 誰をか猜^{うたが}わんと欲す
微行笑殺張公子 微行 笑殺す 張公子
併引昭陽赤鳳來 併せて昭陽の赤鳳を引き来たる

詩全体は、「漢書」五行志中之上の「成帝は鴻嘉・永始の間、好んで微行出游を為し、期門郎の材力有る者及び私奴の客より選び従わしめ、多きは十余に至り、少なきは五六人、皆な白衣袒裼にして、刀剣を帯持す。或いは小車に乗り、御者は茵上に在り、或いは皆な騎り、市里郊塈に出入し、遠くは旁県に至る」、そしてさきにあげた成帝時の童謡を背景とする。「昭陽」は、趙合徳が居住した昭陽殿で、「西京雜記」卷一「昭陽殿」（「漢書」外戚伝下にもほぼ同文あり）に「趙飛燕の女弟は昭陽殿に居る。中庭は彤朱にして、殿上は丹漆、^{みぎ}砌りは皆な銅を沓せ黄金を塗り、白玉の階、壁帯は往往にして黄金の釭を為し、藍田の璧を含み、明珠・翠羽もて之を飾る」とある。

また同じく王は宋末元初の画家銭選の筆になる趙飛燕・張麗華の二美人の図に題した「二美人図」（「秋澗先生大全文集」卷三二）の「右は趙飛燕」と注する詩にいう、

春醉瓊枝意未諧 春に酔う瓊枝 意は未^{かな}まだ諧わず
行雲空鎖望仙臺 行雲 空しく鎖す 望仙臺
九重不隔簫聲斷 九重は簫声を隔て断たず
喚得長空赤鳳來 長空の赤鳳を喚び得て来たらしむ

「望仙臺」は漢の武帝が立てたもので、「三輔黃図」に「通天台は亦た望仙臺と曰う」とある。

また同じく王は「王昭君出塞図」（「秋澗先生大全文集」卷二七）と題する題画詩二首の第二首でも、匈奴に嫁いだ王昭君の境遇を趙飛燕姉妹と対比して、

人生正有新知樂 人生 正に新知の楽しみ有り
猶勝昭陽赤鳳來 猶お昭陽の赤鳳来たるに勝る

とのべる。

また、さきの劉辰翁の子劉將孫（1257～？）がかの楊貴妃の乗馬すがたを画いた図に題した「譚梅屋の蔵する所の楊妃上馬図に題す」（「養吾齋集」卷四）詩では、趙飛燕・合徳の姉妹を楊貴妃と対比して、

遂令圖畫極精藝 遂に図画をして精芸を極めしめ
一一當時意中事 一一 當時意中の事
笑他赤鳳溫柔鄉 笑う 他^かの赤鳳 溫柔郷は
僅得老樊談擁髻 僅かに老樊の談りて髻を擁するを得しのみなるを

とうたい、趙姉妹の末路を嘲笑する。

また、張憲の「双燕離る」(「玉筍集」卷三)の詩のおわりは、

卵破巢既空 卵破れ巢は既に空しく
繫絲徒爾紅 繫ぎし糸は徒爾^{いたず}らに紅し
曾如燕赤鳳 曾つては燕赤鳳の如く
能入漢皇宮 能く漢皇の宮に入りしに

と「能く観閣を超え」た「燕赤鳳」に言及する。

また、陳孚(1259～1309)の「李尚書に唐に飛燕姉妹が嬌困して相い倚るの状を為すを画ける有り」(「陳剛中詩集」卷三「玉堂稿」)という題画詩をあげよう。

玉鸞支枕珊瑚几 玉鸞の支枕 珊瑚の几
緑鬢微困嬌相倚 緑鬢 微かに^{たろ}困く 嬌として相い倚る
太液東風扶不起 太液 東風 扶うれども起きず
一雙芙蓉裊秋水 一雙の芙蓉 秋水に裊たり
粉痕誰寫溫柔鄉 粉痕 誰か^か写し 溫柔の郷
淺蛾對燈煙峰長 浅き蛾は対して燈む 煙峰の長きに
意中似有赤鳳凰 意中 赤鳳凰有るに似たり
唾花猶濺榴裙香 花を唾して猶お^{そそ}濺ぐ榴裙の香
合歡繡帶飄金縷 合歡の繡帶は金縷飄たり
含情兩兩春無語 情を含みて両両 春に語る無し
冰魂縹渺空千古 氷魂は縹渺として千古に空し
月落鴛鴦渡南浦 月落ちて鴛鴦は南浦を渡る

この詩は、さきの岳珂の「無題」詩とはるかに呼応しあっているようで、たとえば第三・四句「太液 東風 扶うれども起きず、一雙の芙蓉 秋水に裊たり」は岳詩の「秋水の芙蓉は早粧を試む」に、第十一・十二句「氷魂は縹渺として千古に空し、月落ちて鴛鴦は南浦を渡る」

は岳詩の「半軒の微雨は鴛鴦に灑ぐ」に対応しているようだ。なお、第三句の「太液東風」は、さきにあげた「外伝」の太液池の故事によるだろう。第八句の「唾花云々」は「外伝」の「后（飛燕）は婕妤（合徳）と坐すに、后は誤まりて婕妤の袖に唾す。婕妤曰わく、「姉の唾は（わが）紺袖に染め入り、正に石上の華の如し。仮令い尚方が之を為すとも、未まだ必ずしも能く此の衣の華の如くならざらん」と。以って石華広袖と為す」を意識するだろう。

さて、ここまであげた用例には、趙合徳の入浴に直接触れたものはなかったが、元代にまったく無いわけではない。楊維禎（1296～1370）が成帝の寵愛を一身にうける趙合徳の住まう昭陽殿のさまをうたった「昭陽曲」（「鉄崖先生古樂府」巻九）にはいう、

美人初睡起 美人 初めて睡りより起き
内史報蘭湯 内史は蘭湯を報ず
散盡黄金餅 黄金の餅を散じ尽くすも
無尋赤鳳凰 赤鳳凰を尋める無し

日が高くなってやっと眠りから覚めたばかりの「美人」合徳に、「内史」宮中の役人が「蘭」花の香りただよう「湯」の仕度ができたことを「報」告する。成帝は「黄金餅」をすべてばらまいても、覗き見はできるが、合徳に通じている「赤鳳凰」をさがしだすことはできない。

この詩の別ヴァージョンともいえるのは、同じく楊の「趙昭儀」（「鉄雅先生復古詩集」巻四）で、「前漢の成帝の宮」と自注する。それもあげれば、

通仙門裏春晝長 通仙門裏 春昼長く
侍兒新擁試蘭湯 侍兒は新たに擁して蘭湯を試ろみしむ
君王空散黄金餅 君王は空しく散ず 黄金の餅
不見宮中赤鳳凰 宮中の赤鳳凰を見ず

「通仙門」は、「外伝」に「又た温室・凝紅室・浴蘭室を^{つづ}け、曲房連檻、黄金白玉にて飾り、壁を以て表裏と為し、千変万状、遠条館に連なり、通仙門に通ず」とある。

つぎは明代の「外伝」の反映をうかがうことにしよう。まず瞿佑（1341～1427）の「飛燕掌舞図」（「御定歴代題画詩類」巻四二）にはいう、

雉扇霓旌錦作圍 雉扇霓旌 錦を囲いと作す
避風臺冷不勝衣 避風台は冷たくして衣に勝えず
身輕每欲随風去 身は軽く 毎に風に随いて去り
追逐花間赤鳳飛 花間の赤鳳を追逐して飛ばんと欲す

第二・三句は、さきにもあげた王嘉の「拾遺記」の「輕風の時に至る毎に、飛燕は殆んど風に随い水に入らんと欲す。……今太液池は尚お避風台有り」が響いていよう。

また、高廩の「趙飛燕姊妹の妝を凝らす図に題す」（「御定歴代題画詩類」卷四二）には

襞積湘裙留淺縐 襞積ある湘裙 淺縐を留め
餘情貪戀溫柔鄉 余情 貪恋す 溫柔の郷

とある。

また、楊慎（1488～1559）の「戯れに西崑体に效う無題十六韻」（「升菴集」卷二〇）には、

回盼傳深意 回盼して深意を伝え
橫陳脱薄粧 横陳して薄粧を脱す
青鸞工渡海 青鸞は工みに海を渡り
赤鳳巧踰牆 赤鳳は巧みに牆を踰ゆ

とある。「赤鳳」に対する「青鸞」の典故は未詳。李白の「鳳凰曲」に「羸女は玉簫を吹き、天上の春を吟弄す。青鸞は独りは去らず、更に手を携うる人有り」、王昌齡の「蕭駙馬宅の花燭」詩に「青鸞は飛び入る合飲宮、紫鳳は花を銜えて禁中を出ず。憐れむ可し今夜千門の裏、銀漢の星槎 一道通ずるを」、李商隱の「相思」詩に「相思樹上の合飲の枝、紫鳳と青鸞と並びに羽儀す」、また蘇鶚の「杜陽雜編」卷中に「宝曆二年、浙東国は舞女二人を貢ぐ。一は飛鸞と曰い、二は輕鳳と曰う」などとあるのに関係するか。

また、徐渭（1521～1593）の「燕子楼」（「徐文長三集」卷七）には、

昨淚幾行因擁髻 昨淚の幾行かは髻を擁するに^よ因り
當年一顧本傾城 当年の一顧は本より城を傾く

とある。「擁髻」は、もちろん樊通德の故事。

また、王世貞（1526～1590）の「官を罷むる雑言、鮑明遠（南朝の鮑照）の体に則とる十章」

（「弇州四部稿」卷一九）の其の十には、

此時飛燕在昭陽 此の時 飛燕は昭陽に在り
君王一身尚不足 君王の一身では尚お足らず
赤鳳飛來燕侍郎 赤鳳 飛來す 燕侍郎
十五吹簫慶安世 十五 簫を吹く 慶安世
尋常挈履馮無方 尋常に履を挈く 馮無方

とある。「慶安世」は「外伝」には無く、「西京雜記」卷二「趙后淫乱」に「慶安世は年十五にして、成帝の侍郎と為り、鼓琴を善くし、能く「双鳳」「離鸞」の曲を為す。趙后は之を悦び、上に白し、御内に出入するを得、絶えて愛幸せらる」とあり、「馮無方」はさきの「外伝」に、太液池での宴のおり、「無方は吹を捨て後の履を持つ」とある。

ところで、明代にもやはり合徳の入浴シーンをうたった詩はあり、岳正の「無題四首、元の馬伯庸の韻に追和す」（「類博稿」卷二）、つまり元の馬祖常の「無題四首」（「石田文集」卷三）に次韻した作の、第二首にはいう、

禍水無情火伏光 禍水は情無くして火は光を伏す
賞眞人屬老披香 眞を賞する人は老いたる披香（殿の博士）に属す
粧成珠賜通宵白 粧成りて珠は賜う 通宵の白
浴罷金酬百餅黄 浴罷みて金は酬ゆ 百餅の黄
宮婢貌難當萬乗 宮婢の貌は万乗に当たり難く
玉環心不在三郎 玉環（唐の楊貴妃）の心は三郎（唐の玄宗）に在らず
昭陽殿裏熊皮席 昭陽殿裏 熊皮の席
緑髮長迷赤鳳裳 緑髮 長に迷う 赤鳳の裳

第三句「珠は賜う云々」は「外伝」の「真臈夷は万年蛤・不夜珠を献ず。光彩は皆な月の人を照らすが如く、妍・醜と無く皆な美豔なり。帝は蛤を以って后に賜い、珠を以って婕妤（趙合徳）に賜う。……婕妤は即ち珠を以って号して枕前不夜の珠と為し、後の寿を為す」にもとづく。第四句は、もちろん成帝の入浴のぞきの場面だが、侍女たちへの報酬たる「黄」「金」「餅」の額を「百」枚とするのは、さきの南宋末の方回の引く「一浴ごとに百餅を賜う」に通じ、さらには晩唐のオリジナル「外伝」の「或ときは百金に至る」にさかのぼる。

つぎは、清代の「趙飛燕外伝」の検討に入る。まず毛奇齡（1623～1713）の歴代にわたる男女の艶事を長編にうたいあげた「艶曲」（『西河集』巻一五七）にはいう、

沈沈夜漏發魚鑰 沈沈たる夜漏 魚鑰を^{ひら}き
先遣雙成恣驩謔 先に双成を遣りて驩謔を恣いままにせしむ
赤鳳青鸞婉嬖殊 赤鳳青鸞 婉嬖すること殊なり
女師太傅然疑作 女師太傅 然^{おこ}疑作る

「双成」は、『漢武帝内伝』に「又た侍女の董双成に命じて雲和の笙を吹かしむ」とあるごとく、西王母の侍女。王母はまず彼女を武帝のもとにやり、楽しみを尽くさせた。「女師太傅」は、先秦の宋玉の「神女の賦」に、楚の襄王が夢で神女と出会い交接したのち、神女が別れるにあたり、「是こに於いて珮玉を揺らし、玉鸞を鳴らす。衣服を整え、容顔を斂む。女師（女性で婦徳を教える教師）を顧み、太傅（女性の守役）に命ず」と描写する。この二つの故事にはさまれた「赤鳳青鸞」は、さきの楊慎の「無題十六韻」をひきつぐもので、趙姉妹がかれら密通者を「婉嬖」親しみ愛することは「殊」異常だった。

また、田雯（1635～1704）が「外伝」読後の感想をのべた「偶たま飛燕外伝を閲す二首」（『古歆堂集』巻一三）の第一首にはいう、

射雀兒郎雪夜廻 雀を射る児郎は雪夜に廻り
趙家姉妹有仙胎 趙家の姉妹は仙胎有り
遠條館接含風殿 遠条館は含風殿に接し
玉體横陳赤鳳來 玉体横陳して赤鳳來たる

「遠条館云々」は、『外伝』に「婕妤は益ます貴幸せられ、号して昭儀と為し、遠条館に近づかんことを求む。帝は少嬪館を作り、露華殿・含風殿・博昌殿・求安殿と為し、皆な前殿・後殿を為す」とある。つぎは第二首。

披香博士唾君王 披香博士は君王に唾し
百寶車迎妃子粧 百宝の車は迎う 妃子の粧
海上蓬萊嗤武帝 海上蓬萊 武帝を嗤う
求仙只在白雲郷 仙を求むるは只だ白雲の郷に在りしを

清末詩人が「趙飛燕」を窺く（深澤）

「百宝車云々」は、「外伝」に「帝は鴛鴦殿の便房にて宮簿を省す。（樊）嬪は簿を^{たてま}上つる。嬪は因りて進言すらく、「飛燕には女弟の合徳有り、美容体性は、淳粹にして信ず可く、飛燕に比せず」と。帝は即ち舍人の呂延福をして百宝鳳毛の歩輦を以って合徳を迎えしむ」とあり、「武帝」「白雲郷」は、「外伝」の成帝が「溫柔郷」の合徳と交わったのち、嬪に語った「吾れは是の郷に老いん。武皇帝の白雲郷を求めしに效う能わざる也」のことばにもとづく。

また、同じく田の「秦・虢二夫人が召きを承け華清宮に遊ぶ図に題す」（「古飲堂集」巻一四）にはいう、

笑它赤鳳輕相妬 笑う 它の赤鳳もて軽く相い妬み
不與昭陽故事同 昭陽の故事と同じからざるを

「赤鳳」をめぐって「軽く妬み」あったのは、もちろん趙飛燕の姉妹。それは、白居易の「長恨歌」に「昭陽殿裏第一人」とうたわれる楊貴妃と、杜甫の「麗人行」にうたわれるその姉妹秦国夫人・虢国夫人による玄宗をめぐる仲むつまじい「故事」とはちがう。

また、単可恵（道光年間ごろ）の「張燈曲」（「白羊山房詩抄」）には、

美人手擲金橘子 美人は手ずから^な擲ぐ 金橘子
天外飛來赤鳳凰 天外より飛来す 赤鳳凰

とうたう。

ところで、清朝の中期において、「趙飛燕外伝」が社会のなかでどのように見られていたかを具体的に教えてくれる資料が、曹雪芹（?～1763）の小説「紅樓夢」第二十三回にある。主人公の賈宝玉が大観園内の生活に嫌気がさし悶々としているのを見たお付きの書僮茗煙は、宝玉の気をはらさせる妙案を思いついた。以下にその一段を引こう。

思案し終わると、本屋に直行し、あの古今の小説やらあの飛燕・合徳、則天武后、楊貴妃の外伝、あの戯曲脚本やらをたっぷり買い込んで来て、宝玉を引き込んで見せました。宝玉はこんな本などこれまで見たこともなかったので、一目見るなり珍宝を得たような喜びよう。茗煙はまたかれに念を押して「園内に持ち込んではいけませんよ。もし人に知られたら、わたくしが食べきれなくて持ち帰るというはめになりますからね」。この宝玉がどうして持ち込まずにいられましょう。二三度ためらいはしたものの、文章の細やかなものだけを何帙か選んで持ち込んで、ベッドの枕元に置き、人気のないときに、ひとりこっそり読むこととしました。あの通俗で露骨なものは、外の書斎に隠しました。

この引用のなかの、茗烟が本屋で買い込んだ通俗的な書物の一種たる「飛燕・合徳」の「外伝」は、明らかに「趙飛燕外伝」であり、貴族の坊ちゃんで知識人でもある賈宝玉が目にするべきものでは、当然なかったのである。

さて、ここまでの清代の用例には、入浴をのぞくシーンはあらわれていない。そこで、以下には合徳の入浴とからむ詩歌をあげることにする。まずは金粟山人と号した彭孫遹（1631～1700）の「金粟閨詞一百首」（「松桂堂全集」卷三一）の一首。

十斛温泉洗凝脂 十斛の温泉 凝脂を洗う
 雙鬟小婢護門時 双鬟の小婢 門を護る時
 懷中空有黄金餅 懷中 空しく有り 黄金の餅
 玉體何由得暫窺 玉体 何に由りてか暫らく窺くを得ん

「温泉」で「凝脂を洗う」のは白居易「長恨歌」の楊貴妃のイメージで、その「玉体」は漢の成帝のように「懷中」に「黄金餅」を準備したとしても、「窺」きはできない。

また、査慎行（1650～1727）は「家保三兄の小影に題す」詩（「敬業堂詩集」卷一一「竿水集」）で「分として髻を擁して伶玄に対する無し」とうたい、「緑頭鴨」詞（「詩集」卷五〇「余波詞下」）で「疑うらくは箇^かの、人兒の髻を擁し、愁いて伶玄に対する有るを」とうたうが、「白芍薬、孔心一（衍樾）少参に和す二首」（「詩集」卷七「仮館集下」）の第一首は、白い芍薬の花を美人の入浴になぞらえてこうたう。

扶頭一笑粉生光 頭を扶^{ささ}えて一笑すれば粉として光を生じ
 鏡裏匆匆看改粧 鏡裏 匆匆として粧を改めしを見る
 金餅賺來初罷浴 金餅 賺し来たりて 初めて浴を罷め
 瑤墪行過但聞香 瑤墪 行き過ぎて 但だ香りを聞^かぐ
 含嬌似爾情難禁 嬌を含むこと爾^{なん}じに似たる 情は禁じ難く
 太潔從人忌不妨 太^{はな}はだ潔きは人に從^{まか}せ 忌まるるを妨げず
 莫向中書誇故事 中書に向かいて故事を誇る莫く
 素心羞對紫薇郎 素心 紫薇郎に対するを羞ず

第三句は、「金餅」を成帝から侍女が掠め取った後、湯からあがったばかりの趙合徳のあでやかさで、芍薬の花のつやっぱい白さをたとえる。

また、詞にも入浴をうたったものがあり、董以寧（1629～1669）が「蘇幕遮」（「蓉渡詞」卷中）の調べにのせた「屏辺にて浴声を聴く」屏風のかげで入浴中の女性の声を聴く、と題する

詞をあげよう。

兔華輕	兔華は軽く
螢照冷	螢照は冷たし
瞰浴潛來	浴を瞰んとて潜かに来たり
轉傍湘簾等	轉たた湘簾に傍いて等つ
誰料銀屏遮鳳脰	誰か料らん 銀屏の鳳脰を遮ざるを
小玉嬌憨	小玉は嬌憨にして
枉賺黄金餅	枉しく賺す 黄金の餅
粉應消	粉は応に消ゆべく
珠定映	珠は定めて映ぜん
喚取湯添	湯を喚取して添えしめ
冷熱心頭省	冷熱は心頭に省す
荳蔻方按知未竟	荳蔻は方めて按み 未まだ竟らざるを知る
半晌纔看	半晌にして纔かに看る
禿袖來花徑	禿袖の花徑に来たるを

この詞がうたうのは、浴室ののぞき見ならぬ盗み聞きだが、前関のおわり「枉しく黄金餅を賺す」はもちろん、後関の「荳蔻云々」も「外伝」の「婕妤（趙合德）は荳蔻の湯に浴し、露華百英粉を傳く。帝は嘗つて私かに樊嬪に語りて曰わく、「后は異香有り」と雖も、婕妤の体が自のずと香るに若かざる也」とにもとづく。

さて、ここできわめて興味深い資料を引くことにしよう。それは、清初の洪昇（1645～1703）が康熙二十七年（1688）に完成した、唐の玄宗と楊貴妃のラヴ・ロマンスを主題とする戯曲「長生殿」である。もともと玄宗と楊貴妃の関係が成帝と趙飛燕姉妹の関係と容易にオーバーラップすることは、第二齣「定情」で、宮女が「念奴嬌序」の調べにのせて「借問す、此れ従り宮中は、阿誰が第一なる。趙家の飛燕が昭陽に在りて、寵愛されし処、応に是れ一身に承当せしに似たるは。」とうたうごとくであり、洪が「趙飛燕外伝」を実作の参考にすることは当然で、また戯曲では「外伝」のような俗っぽい典故を愛用するのである。たとえば、同じく「定情」のはじめ、玄宗に扮した生が「東風第一枝」の調べにのせた曲で、

願此生終老溫柔 願わくは此の生は終には溫柔に老いん
白雲不羨仙鄉 白雲の仙郷を羨まず

とうたうが、これは明らかに「外伝」の成帝の「吾れは是の（合徳の溫柔）郷に老いん。武皇帝の白雲郷を求めしに效う能わざる也」ということばにもとづく。

ところで、この「長生殿」の第二十一齣は「窺浴」と題し、浴室内での玄宗と楊貴妃のかなりエロティックな戯れをお付きの侍女の窺き見を通して描写する。そこには「悄り偷み窺けば、亭亭たる玉体は、宛かも波に浮かぶ蘭蓀の、露を含みて嬌輝を弄するに似たり。轻盈たる臂腕は香膩を消し、綽約たる腰身は碧漪に漾う」といった句もあり、また玄宗のさまを「襄王は渴倒す陽台の下」、楊貴妃のさまを「神女は携さえ將ち暮雨に帰る」と宋玉の「高唐の賦」のイメージを借りてうたう。晩清の周寿昌は「思益堂日札」巻七「読曲雜説」第十三、李漁「鳳求凰」の小引「字字双」の猥褻を述べたくだりで、「西廂記」の「酬簡」一折、「牡丹亭」の「驚夢」一折とならべて、「長生殿」の「窺浴」折の内は、尤も蕩冶を極む」とする。しかしこの描写では、よりふさわしいと思われる「外伝」の入浴窺きの典故は使用されない。あるいは「外伝」を使う洪にとっても、皇帝が高貴な女性の入浴をのぞくといった場面は、世間体からしてとくに披露にくいものだったのかもしれない。

なお、戯曲といえば、すこし後の多才多芸な詩人舒位（1765～1815）には、「外伝」自序の作者伶玄と妾樊通徳との交流の一段を描いた「伶元通徳」なる戯曲一卷がある。かれの詩集「餅水齋詩集」十七巻に寄せた王曇の序文「舒鉄雲姨丈の瓶水齋詩集の序」（『煙霞萬古樓文集』巻五）には「（舒姨丈は嘉慶）十四年己巳（1809）、太倉の畢子筠華珍と与に京国に流寓し、「伶元通徳」「呉剛修月」数十齣を作る。微服にて酒樓の歌を聴き、重賂もて楽人の価を購うこと、王昌齡の旗亭次第、李協律の流布管弦の若く、王門の伶人は、争いて為に搬演する也」とある。

また、王曇には「鉄雲先生は宣武坊南に於いて、鐙火の暇に、「相如文君」「伶元通徳」の諸齣を作る。商声楚調、樂府中の肴蒸俎豆にして、元・明の科譚家の跂及す可き所に匪ざる也。太倉の畢子筠孝廉華珍は南北宮を按じて之を譜し、梁園の衆子弟は粉墨して之を搬演す。亦た一時の佳話なり。紀するに詩を以ってす」（『煙霞萬古樓詩選』巻二）という長題を持つ、舒の戯曲を顕彰した詩があるが、その長詩から「伶元通徳」の芝居を「相如文君」とからめて述べた部分を引こう。

文園綠綺文君抱 文園の緑綺は文君抱き
通徳知書馬遷好 通徳は書を知り馬遷は好ろし
元帝吹簫度曲時 元帝 簫を吹き曲を度する時



舒位「樊姬擁髻」の挿絵

相如渴死伶元老 相如は渴死し伶元は老ゆ
王孫畢竟愛才名 王孫は畢竟 才名を愛し
博士披香太薄情 博士は披香にして太はだ薄情なり
但得薦才楊得意 但だ才を薦むるを得たり 楊得意
不愁唾面渫方成 面に唾するを愁えず 渫方成

そして、この戯曲「伶元通徳」は、「樊姫擁髻」と改名して、「卓女当盧」「酉陽修月」「博望訪星」とともに舒位の「餅筵館修簫譜」四巻の一巻となり、机に坐る伶玄と机によって立つ樊通徳の語りあう様を描いた挿絵がついている。舒の作劇は、おもに「外伝」の「伶玄自序」を全体の枠組みとしつつも、「外伝」の主内容たる趙飛燕姉妹の物語を「旦」の扮する樊通徳の回想のなかで語らせている。登場するのは、伶玄（諱を避けて伶元とする）に扮した「生」と樊通徳に扮した「旦」の二人だけである。まず「生」が「白鬚道服」で、「旦」が「燭を執り淡装」で登場する。以下にはおもに「仙呂」調「桂枝香」の調べにのせた「旦」の歌唱がつづくのだが、そのなかの趙飛燕をうたう一節は、

彼女は微賤の出身で、舞裙歌扇をお勉強、お上が服を換えお忍び歩きされたおかげ、陽阿主のお屋敷で衣を着替え馴染みとなりました。

また、趙合徳をうたっては

遠条仙館は、含風別殿につづきます。そこで風絃つまびいて、瀧と洑の川のように心はひとつ、月も羞らう顔かたち、美女で名高き尹氏も邢氏も顔隠すほど。でもたとえ妍を争い憐れみを取り、妍を争い憐れみを取り、君王を迷わせたとして、披香博士の老眼は瞞せやしない。

そして「赤鳳」については、「殿上に黄貂出で、楼中に赤鳳眠る」とうたうものの、趙合徳の入浴については、言及がまったくない。

7

さて、ここでは清初にわきおこった、「外伝」の入浴の典故をめぐる詞の競演を紹介したい。その主人公は、清初の詩壇の大御所たる王士禛（1634～1711）である。おそらく順治十八年（1661）、二十八歳、揚州推官の任にあったとき、王は「海棠春」（「衍波詞」巻上）の調べにのせ

た「閨詞，程村・羨門に同ず」と題する詞の四首連作を発表した。四首にはそれぞれ「暁粧」「午睡」「晚浴」「夜坐」という自注がある。いま「晚浴」と注する，「閨」へや住まいの婦人の，夕べの入浴をうたった詞をあげよう。

星光碎月搖花影	星光は月を碎き花影を揺らす
神麥響，夢廻人醒	神麥響き 夢廻り人醒む
小婢鬻蘭湯	小婢は蘭湯を鬻め ^{あなた}
玉沁冰壺冷	玉は氷壺に沁みて冷たし

沈香卷髮盤龍鏡	沈香 髪を巻く 盤龍の鏡
遅半晌，鮫綃重整	遅きこと半晌 鮫綃は重ねて整う
不管綉簾前	管せず 綉簾の前にて
費盡黄金餅	黄金の餅を費やし尽くすを

王は前関の第三句につき「華嚴經」の「鬻香長者は香を調うるを善くす」を引き，「鬻は，煮る也」と注する。そして，とくに注目すべきは，後関の第四句に「末句は，漢の成帝・合徳の事を用ゆ」と自注することである。これはもちろん「外伝」の成帝が合徳をのぞくのに「黄金餅」を費やした故事だが，ここで王がわざわざ自注をつけるのは，当時かれと詩詞の唱和をしあい，たがいに鑑賞しあっている友人たち，かれの周囲の最上級ともいえる知識人たちでさえ，読者のまれな「華嚴經」と同様，「外伝」を知らないか，読んでいないものが大多数だったことを示しているだろう。それは，いいかえれば，王の知識の範囲がほかの一般知識人と隔絶した広がりを持っていたことも示すだろう。

この「海棠春」の詞牌による連作は，王の詞題に「程村・羨門に同ず」とあったごとく，「程村」鄒祇謨，「羨門」彭孫遹とともに作りあったものである。当時詩文界で王におとらず「彭王」と並称されていた彭の連作は，いまかれの詞集「延露詞」三巻のなかに見当たらず，また周囲の詞人たちが目にした形跡もないので，あるいは公表をいやがったのかもしれない。しかし王による「外伝」入浴の刺激を十分にうけたろうことは，さきにあげた「金粟閨詞一百首」に明らかである。

そして，鄒の連作は幸いにも残っている。鄒祇謨（順治十五年（1658）進士）の「海棠春」（「麗農詞」巻上）にのせた「閨詞，阮亭（王士禛）の韻に和す」詞四首のうち第三首「晚浴」をあげよう。

銀牀月起廻孤影	銀牀 月に起きて孤影を廻らす
---------	----------------

清末詩人が「趙飛燕」を窺く（深澤）

撇團扇，宿醒初醒	団扇 ^{はら} を撇い 宿醒初めて醒む
珠露浴薔薇	珠露 薔薇に浴し
光燭流螢冷	光燭 流螢冷たし
晚妝怯向菱花鏡	晚妝 菱花の鏡に向かうに怯ゆ
欹髻髻，金釵慵整	髻 ^{ふりわけがみ} 髻を欹だて 金釵は整うるに慵 ^{もの} うし
殘粉較何郎	殘粉 何郎に較ぶ
香汗消湯餅	香汗 湯餅 ^{もち} を消ゆるに

ここで注意すべきは、後関の末句である。和韻の詞ゆえに最後はかならず「餅」の字にあわせて終わらねばならないが、王が婦人の入浴を描くにきわめてふさわしい「黄金の餅」金の小判という「外伝」の典故で締めくくったところを、鄒は「湯餅」ワンタンでおさめた。この上下二句は、魏の美男子何晏の故事で、「世説新語」容止篇に「何平叔は姿儀美しく、面は至りて白し。魏の明帝は其の粉を傳せるかと疑い、正夏の月に、熱き湯餅を与う。既に噉^くうに、大汗出づ。朱衣を以って自から拭うに、色は転たた皎然たり」とある。鄒が王の「外伝」にあわさなかったのは、おそらく「外伝」の故事を知らなかったか、もしくは使う勇気がなかったからだろう。それゆえに誰もが知る何晏の故事でお茶を濁したと思われる。

さて、王を中心とし彭・鄒も参加した三人の「閨詞」四首連作は、当時の王士禛と交流のあった知識人たちの間でかなり評判になったらしく、この連作に自から加わるものが続出した。まず程康莊（1613～1679）の「海棠春」（「衍愚詞」）による「閨詞、阮亭・程村の作に同ず」のうち「晚浴」をあげよう。

日移涼散疎梧影	日移り涼散じて梧影 ^{きば} 疎らなり
飛的的，綺寮螢醒	飛ぶことの的 ^{てき} として 綺寮に螢醒む
珠汗瀦蘭湯	珠汗は蘭湯に瀦 ^あ う
坐定冰肌冷	坐定まりて氷肌冷たし
當簷明月圓如鏡	簷に当たる明月 円きこと鏡の如し
扇新浴，香奩徐整	新浴を扇ぎ 香奩 ^{おも} は徐むろに整う
茉莉微風	茉莉 微風馥たり
旋欲烹茶餅	旋 ^{たちま} ち茶餅 ^に を烹んと欲す

後関の末句、「餅」でおさめねばならぬところ、程は「茶餅」上等の茶葉をむして饅頭形に

固めたもの、を煮る、つまりお茶を入れようとする、と上品におさめ、「外伝」から大きくはずしている。

つぎは尤侗（1618～1704）の「海棠春」（「百末詞」巻上）による四首のうち「晚浴、阮亭の韻に和す」をあげよう。

畫簾雙燕爭花影	画簾の双燕は花影を争い
睡未足、海棠驚醒	睡り未まだ足らず 海棠は驚き醒む
玉骨六銖輕	玉骨は六銖の軽さ
心怯温泉冷	心は怯ゆ 温泉の冷たきに

起來弄色芙蓉鏡	起き来たり色を弄そぶ 芙蓉の鏡
分外好、髻鬆鬢整	分外に好ろし 髻は鬆み鬢は整う
無力倚薰籠	力無く薰籠に倚り
呼點龍團餅	呼びて点けしむ 龍団の餅

後関の末句、尤は「薰籠」衣服に香をたきしめるための籠で覆われた香炉、によりかかりつつ、侍女を呼んで「龍団餅」龍のすがたを型押しし饅頭形に固めた香料、に火をつけさせる、とやはり上品におさめ、「外伝」から意味あいはずしている。

つぎは呉綺（1619～1694）の「海棠春」（「林蕙堂全集」巻二三）の「王阮亭の閨情に次す四首」のうち「晚浴」をあげよう。

春波欲浸桃花影	春波は浸さんと欲す 桃花の影
試荳蔻、倦眸初醒	荳蔻を試ろみ 倦みし眸は初めて醒む
綃解下裳紅	綃は解く 下裳の紅きを
壺瀉珍珠冷	壺より瀉ぐ 珍珠の冷たきを

藏羞移却粧臺鏡	羞じらいを蔵して移却す 粧台の鏡
下繡幄、鞋弓慢整	繡幄を下ろし 鞋弓を整うるに慢たり
展轉出來遲	展転として出で来たること遅し
月上懸金餅	月上りて金餅を懸く

後関の末句、呉は王の原作と同様に「金餅」でしめくくるが、それは夜空に「懸」かって丸く輝く月の形容であり、「外伝」とは何の関係もない。ただ、かれは散文「蘭を瘞む銘」（「全

集」卷一二）で「三更に髻を擁し、樊通德は恒に伶玄に伴なう」という句を残している。

つぎは陳維崧（1625～1682）の「海棠春」（「烏糸詞」卷一）による「閨詞，阮亭の原韻に和す」四首のうち「晚浴」と注する作をあげよう。

韓馮啄破鞦韆影	韓馮（の化身たる鴛鴦）は啄ばみ破る 鞦韆の影
瓊扇裏，春醒初醒	瓊扇の裏 春醒初めて醒む
半晌卸金蟲	半晌にして金虫（の髪飾り）を卸し
小試蘭湯冷	小しく試ろむ 蘭湯の冷たきを

後堂憎殺青銅鏡	後堂 憎殺す 青銅の鏡
怕照見，雲鬟未整	照見せらるを ^{おそ} る 雲鬟の未まだ整わざるを
莫道少人窺	人の窺くを ^か 少くと道う莫かれ
天上堆金餅	天上に金餅堆たかし

後関の末句，陳もやはり王の原作と同様に「金餅」でおさめる。上句では，あなたの入浴を「窺」く人がいないなんて思っちゃいけない，とあるので，この「金餅」は成帝の故事とつなげたいところだが，「天上」を考慮すれば，やはり夜の天上で金色に輝く月があなたをのぞいている，と理解すべきか。

つぎはさきにもあげた董以寧の「海棠春」（「蓉渡詞」卷上）による「閨詞，程村・阮亭の韻に補和す」四首のうち「晚浴」をあげよう。

梧桐月暗人無影	梧桐 月暗く 人は影無し
私瞰處，舊愁都醒	私かに瞰る ^{すべ} 処 旧愁は都て醒む
燈晃背湘簾	燈 ^{あか} 晃るくして湘簾に背き
玉墮春波冷	玉は春波に墮ちて冷たし

金釵卸向銀華鏡	金釵は卸して銀華の鏡に向かい
拂拭久，綠雲猶整	払拭すること久しく 緑雲は猶お整う
簫局漫熏衣	簫局は ^{おもむ} 漫ろに衣を熏じ
幾度添宮餅	幾度か宮餅を添えし

後関の末句，董は「簫局」薫籠で婦人の衣服を「熏」くすべ香りづけするための「宮餅」宮中で焚く饅頭形に固めた香料，でおさめ，「外伝」とは距離を置く。しかし王の原作にはかな

り刺激されたらしく、さきの「蘇幕遮」による「屏辺に浴声を聴く」詞では、「外伝」入浴シーンに気づいて十分に読み込んだ形跡が明らかである。

つぎは王の後輩にあたる陳玉基（1636～？）の「海棠春」（『学文堂詩余』『耕煙詞』）による「王阮亭の韻に和す」四首のうち「晩浴」をあげよう。

繡簾月漾波紋影 繡簾 月は漾^{ただよ}わす 波紋の影
覺無數、春醒難醒 数無きを覚ゆ 春醒は醒め難し
背燭解羅襦 燭に背きて羅襦を解き
風護紗窓冷 風は護る 紗窓の冷たきを

玉人如坐菱花鏡 玉人は菱花の鏡に坐するが如し
喜雙鬢、欲敲還整 双鬢を喜び 敲^{そはた}てんと欲して還た整う
嬌怯起來遲 嬌怯にして起き来たること遅し
待煮龍團餅 龍団の餅を煮^{ほつ}んと待す

後関の末句、陳はさきの尤侗と同じく「龍団餅」でおさめるが、尤のそれが固形香料だったのにたいして、これは饅頭形に固められ龍の型押しのある上等な茶葉である。どちらにしろ、「外伝」の状況には程遠い。

8

以上述べきたったごとく、王士禛の「閨詞」連作の「外伝」自注、またかれの詞にたいする多くの和作に「外伝」の使用が見られないことなどからみて、清代の初期には、「趙飛燕外伝」は忘れられた存在、もしくは一種のタブーとなっていたらしいことは、十分に推定できる。しかし清も末期になると、状況に変化が現れたごとくである。たとえば、時期はやや早いですが、晚清文芸の先駆者とされる姚燮（1805～1864）の「閒情統詩八章」（『復莊詩問』巻六）の第五首には

合歡擬借屠蘇酒 合歡 借りんと擬^{ほつ}す 屠蘇の酒
續恨應無慎岬膠 続恨 応に無かるべし 慎岬の膠

とあるが、「慎岬膠」は「外伝」の「帝は緩弱なるを病み、太医方は救う能わず、奇薬を求む。嘗つて慎岬膏を得て、昭儀に遺る。昭儀は輒^{おく}ち帝に進む。帝は一丸を御せば一幸す。一夕、昭

儀は酔いて七丸を進む。帝は昏夜に昭儀を擁し、七成帳に居り、笑うこと吃吃として止まず。……須臾にして帝は崩ず」にもとづき、けっきょくは成帝を死にいたらしめた房中薬である。

また、曾樸（1872～1935）が蘇州の名妓賽金花（書中では傅彩雲）を主人公にして、駐独露公使洪鈞（書中では金雯青）などとの情事を中心に清末の官僚・文士たちの遺聞逸事を描写した小説「孽海花」の第二六回は、回目の上句に「主婦は書を求め、房中に赤鳳飛ぶ」とある。この回の前半は、彩雲が妾として仕えていた雯青が彼女と京劇の人気俳優孫三児との情事を耳にして病いに倒れ死去した後、四十九日までは家で喪に服していた彩雲が孫三児との情事を復活したので、雯青夫人は陸葦如（モデルは陸潤庠）・錢唐卿（モデルは汪鳴鸞）の二大人と相談のうえ、彩雲を追い出すこととし、また突然雯青の著作「元史補証」の手稿が彩雲の部屋にあることを思い出し搜索するといったあらすじで、明らかに「外伝」が世間に普及したことを前提とした回目であり、「赤鳳」を孫三児にあてるのはふさわしい。

そして、詩においても、賽金花と「外伝」は繋がっている。光緒三十三年（1907）張鴻が日本の長崎領事に就任したおり、かれに従って領事館で勤務し、かつ明治大学法律科で学んだことのある孫景賢（1880～1919）の「客に秋舫の故妓の事を道う者有り、感嘆し賦して四律を成す」（『龍吟草甲集』）は、「客」黄人が「秋舫」呉毓麟の「故妓」昔なじみの妓女たる賽金花の身の上話をしたのに感じての作だが、その第四首の終わりにはいう、

水天賭説長安酒 水天 賭説す 長安の酒
擁髻休燈有剩哀 髻を擁し灯を休めて剩哀有り

下句の「擁髻」はもちろん「外伝」の樊通徳の故事である。

さてここで、はじめにあげた黄遵憲にもどりたい。かれは「日本雜事詩」を発表してから3年後の1882年、光緒八年、明治15年には日本を離れて、アメリカのサンフランシスコ総領事に赴任し、1885年に帰国して、故郷たる広東の嘉応州（いまの梅州市）におちついた。そして1887年、光緒十三年五月、日本についての百科全書ともいべき膨大な「日本国志」40巻を完成した。全書は国統・隣交・天文・地理・職官・食貨・兵・刑法・學術・礼俗・物産・工芸の十二志に分かれ、とくに礼俗志は、日本風俗について詳細に記述するが、残念なことに「浴池」についての記述はない。ただ卷三十六「礼俗志」温泉の条で箱根・熱海・伊香保の有様を紹介するのみである。つまり、かれも「浴池」にたいする感興を披露したのは、日本で原本「日本雜事詩」を発表した一度のみなのである。黄氏も「東遊紀盛」の不明な著者も、儒教にもとづく礼教の締め付けがゆるんだ清朝末期において、たまたま中国の礼教をはなれて「東夷」の日本を訪れ、本来開放的な文明開化の気分のなかで、「浴池」銭湯という異文化に出会い、「趙飛燕外伝」にみなぎる性的放埒をより直接に感覚し、その強烈な体験が、従来の顧慮

を振り払わせ、原本「日本雑事詩」第八七首のように、そのまま表現されたといっている。

またいいかえれば、かれら知識人が銭湯を体験したときに、すぐさま「外伝」の故事を連想したのは、この「趙飛燕外伝」というポルノグラフィーが文化の表層に出ることは、穏当な「擁髻」の故事を除いては、まれだったにもかかわらず、文化の深層ではとぎれることなく伝えられてきたことを示すだろう。そしてその第四句は当然わたしのように「未まだ金餅を消いざるも亦た偷み窺う」と訓読すべきだろう。男女の湯船に近いこの日本の風呂屋では、かの漢の成帝が黄金の小判を侍女たちにばらまいておのれの趙合徳のぞき見の口封じをしたという煩雑な手間をかけなくても、こっそりのぞくことができるのだ。大陸の性的タブーから解放された若い詩人の興奮がこちらまでつたわってくるような一句である。